

金子文子 無政府主義者。明治二十七年一月二十五日神奈川県横浜濱生れ、大正十五年七月二十一日没（九〇四一六）。父は佐伯文一、母方の祖母の五女として入籍。大正十年上京して正則英法学校、研數學館に學ぶ。翌年朝鮮人朴烈（き）知り同様、不逞社を興して雜誌『黒濤』（一號・大正十一年七月十日、二號・八月十日黒濤發行所）、『太い鮮人』（一號、二號、三號）『フネイ鮮人』改題『現社會』大正十二年三月十五日太い鮮人社、四號・六月二十日不逞鮮人社）を發行、自ら『金子文子』、朴文子等の筆名で執筆した。大震災後、大逆豫備罪に問はれ、十五年朴と共に死刑判決、無期懲役に減刑も獄中で益死。獄中手記『何が私をかうさせたか』（昭和八年七月十日春秋社。復刻版・四十七年十月二十日、復刻第一刷増補版・五十年十一月黒色戦線社）、『金子文子歌集』（瀬戸内晴美解説、昭和五十一年三月黒色戦線社）がある。

